令和３年度　　新潟市花育推進委員会（第２回）

日　時：令和４年３月 17 日（木）午後２時 00 分～
会　場：新潟市役所ふるまち庁舎　401 会議室

食と花の推進課長	本日は年度末の大変お忙しい中お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。今回は、当初２月に予定していましたがこちらの都合で急きょ予定を変えさせていただき、大変申し訳ありませんでした。皆さまご協力いただきまして、本当にありがとうございます。 まだコロナが、まん延防止等重点措置が解除されたとはいえ、高止まりの状態が続いておりますので、このようなリモートとリアルを織り交ぜた形の開催とさせていただきました。 先月、ふるさと村でフラワーウエーブ新潟 2022 が無事開催され、一部縮小したところもありましたがご来場の方から大変お喜びいただいたと思っております。関係者の皆さまに改めて感謝申し上げたいと思います。 現在新潟市では、新潟市の最上位計画であります総合計画の着手に取り組んでおります。次期総合計画ですと、令和５年度から８年間の計画になりますので、来年度いっぱいをかけて作っていきますが、こちらの第３次花育推進計画についても、次期総合計画と計画期間を同じとしまして、本市の特色である花育を、花育の領域の分野別計画ということで位置づけられております。 第３次の花育推進計画の目指すところですが、前回の第１回の会議で、委員の皆さまから頂戴したご意見を踏まえまして、花の一大産地である本市として、花を通して市民がより心豊かに暮らせるような町づくりを目指しまして、皆さまから本日も忌憚のないご意見をいただきたいと思っておりますので、２時間弱となるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。
司　会	ありがとうございました。本日は議会開設のため、課長と補佐が途中退席させていただきますので御了承ください。
食と花の推進課長	申し訳ありません。
司　会	それでは、議事に入る前に３点確認させていただきます。 １点目は委員会の形態についてです。本日は対面とオンラインを合わせた形態となっております。本日は片岡委員がご欠席です。対面でのご出席は坂井委員と村井委員です。オンラインのご出席は青山委員、阿部委員、片岡委員、北澤委員、玉木委員、中野節子委員、中野優委員になっております。 また、会場内の人員を最小限におさえるため、関係課を参集していないことを申し添えます。

	２点目は、配付資料の確認です。事前にお送りした資料ですが、まず座席表、委員名簿、次第、次に資料１－１「令和３年度花育推進事業の取組みについて」、資料１－２「令和３年度秋の花育の日イベント参加者アンケート結果」、資料１－３「令和２年度新潟市内産の花購入 500 円割引券　利用者集計結果」、参考資料として「第１回花育推進委員会　花育事業体験報告意見交換、まとめ」。続いて資料２－１「第３次新潟市花育推進計画策定の趣旨（案）」、資料２－２「第３次新潟市花育推進計画の施策方針（案）」、資料２－３「第３次新潟市花育推進計画の構成（案）」、次に資料２－４「施策を推進する視点（案）」、資料２－５「第３次新潟市花育推進計画策定スケジュール（案）」、次に資料３－１「令和３年度花育活動の実施に関するアンケート（案）」、資料３－２「令和４年度市政世論調査　希望テーマ（案）について」、次に事例研究資料「小須戸小学校　地域のボケを生かした取組み」、次に事例研究参考資料「にいがた花育通信 33 号」。事前にお送りした資料は以上ですが、追加としてメールでお送りした資料が参考資料として「花のチカラ緑のチカラ」、資料４「令和３年度花育俳句優秀区選考結果について」です。差し替えとしてメールでお送りした資料が、資料３－１差替「令和３年度花育活動の実施に関するアンケート（案）について」、続いて資料３－２差替「令和４年度市政世論調査　希望テーマ調書」になります。以上ですが、資料の不足はございませんでしょうか。大丈夫でしょうか。 それでは３点目になります。会議の録音についてです。当会議は公開となっております。後日、ホームページなどで議事録を公開するため、会議を録音させていただきますので、ご承知おきください。また、記録、広報用に写真撮影をさせていただきますので、ご了承ください。 取材の申込みですが、本日１件ありましたが、都合が悪くなったということでキャンセル、取材申し込みはありません。一般傍聴もございません。 それではここからは中野会長から議事を進行していただきます。中野会長、よろしくお願いいたします。
中野会長	新潟大学の中野と申します。よろしくお願いいたします。皆さんお久しぶりです。 それでは議事を進行させていただきます。進行の方法としましては、１から４まで４つ議題がありますけれども、各議題の説明が終わった時点でその都度皆さまからのご質問、あるいはご意見を伺いたいと思います。それではまず（１）としまして「令和３年度花育推進事業の取組みについて」事務局からご説明をお願いします。
事務局	それでは私から説明させていただきます。まず資料１－１をご覧ください。「令和３年度花育推進事業の取組みについて」です。第１回推進委員会以降の

	項目について報告をさせていただきます。１ページ目下の 10 月の取組内容としまして、いくとぴあ食花の新潟フラワーマルシェと同時開催で、花育の日の認知等を広めるための花育イベントを開催いたしました。先に委員の皆さまに郵送させていただいた花育通信でも紹介したものです。ここで資料１－２をご覧ください。こちらが、このイベントでワークショップに参加した方のアンケート結果になります。参加者の年代を見ますと 50 代が一番多く、40 代、60 代、10 代、30 代と続きます。土曜日開催であったことが比較的若い世代の参加につながった要因の一つと思われます。また 50 代と 20 代などの親子での参加も見られました。問１の花育の日の認知度ですが、こちらは低く 22 パーセントでしたが、問２の生活の中で花や緑が必要だと思う人は 99 パーセント、問３の今後も花や緑のイベントに参加したいと答えた人は 98 パーセントと高い割合でした。資料裏面は感想になっております。「楽しくワクワクした」「リラックスできた」などの声が寄せられました。 　資料１－１にお戻りください。裏面です。「関係団体と連携した取組み」の①「花を贈る日キャンペーン」ですが、３「いい夫婦の日」の 11 月に食育花育センターで、花のメイン装飾とギフトアレンジメント展示と、花のある暮らしの提案展示を行いました。ＳＤＧｓへの貢献と花のある暮らしを楽しんでもらおうと、最終日に展示ギフトアレンジメント 11 点と、展示終了後のメインフラワーをミニブーケにしたもの 40 点とを来場者に抽選でプレゼントさせていただきました。４「フラワーバレンタイン」は若い世代を意識して、新潟日報メディアシップの１階を会場として行いました。新潟の花を知り、楽しむきっかけとなるように、今後も実施していきたいと思います。②の「にいがた花絵プロジェクト」は「Ｓｕｎｄａｙだけのチューリップ花屋さん」を 12 月 19 日と３月 12、13 日にも万代シテイで開催され、人気を博していました。また、以前チラシをお送りした「春を感じるフラワーアレンジメント講座」を３月 13 日に旧第四銀行住吉町支店で開催しました。フラワーデザイナーの五十嵐仁さんによるデモンストレーション作品の一つは、現在クロスパル新潟に展示させていただいています。内容については花育通信などでもご紹介していきます。 　続きまして資料１－３をご覧ください。Ａ３横のものです。令和２年度に実施しました、フル・フル・フラワーキャンペーンで、新潟市産の花購入 500 円割引券を利用した方についての集計結果です。住民基本台帳人口に対する購入者の割合を区別で比較しますと秋葉区が一番多く、西区、中央区が続き、東区が一番少ない結果となりました。区別の購入人数の順位と、店舗数の順位がほぼ同じ結果となりました。性別では利用者の７割以上が女性でした。年代別では上位の 60 代、70 代、50 代で、全体の７割を超えました。男性の利用者と、10 代の利用者については西区が一番多く、10 代の男性女性については、西区

	の学生の利用がうかがえる結果となりました。簡単ですが、以上で花育推進事業の説明を終わります。
中野会長	ありがとうございました。ただ今のご説明に関しまして、ご質問、ご意見等ございましたらお願いいたします。ご質問、ご意見等ある場合には、挙手をしていただくか、あるいはチャットで連絡していただければと思います。よろしくお願いいたします。 いかがでしょうか。 無いようでしたら引き続き（２）「第３次新潟市花育推進計画の概要（案）について」事務局よりご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
事務局	それでは続きまして「第３次新潟市花育推進計画の概要（案）について」説明させていただきます。まず右上に「参考資料」とあります「第１回花育推進委員会のまとめ」の資料をご覧いただきたいと思います。中野節子委員にお話しいただいた部分をまとめた部分が１、２枚目となりまして、その後の意見交換をまとめたものが３枚目です。３枚目をご覧ください。意見交換を簡単に振り返りたいと思います。第１回花育推進委員会では、花育により目指す未来の新潟市について、皆さまに意見交換をしていただきました。限られた時間でしたが、より緑豊かで農業が産業として確立した強い未来を目指すというご意見がありました。そのためには人材育成が必要で、人材を育てて次の世代につなげていくとし、その手段として二つあがりました。１つめは「さまざまな主体が、それぞれ活動しながら手をつなぐことにより、点と点がつながり、編み目のように広がって大きくなること」２つめは「生産サイドと消費サイドを育てながら、小さな活動をどんどん作り上げ大きくしていくことで、新しい活動ができる」ということでした。参考までにこれをイメージしたものが下の図になります。 次に資料２－１をご覧ください。Ａ４横の資料です。「第３次花育推進計画策定の趣旨（案）」です。策定の趣旨としまして丸の一つ目、平成 20 年 10 月に「花や緑」を大切に育み、心豊かなまちとなり、名実ともに「食と花の政令市」となることを目指して「新潟市花育推進計画」を策定し、平成 27 年に基本理念を継承して「第２次新潟市花育推進計画」を策定したと経緯を記載しています。 丸の二つ目は「第３次新潟市花育推進計画」は令和５年度から 12 年度までの８か年計画として策定し、基本理念を継承しながら、産地ならではの新潟市らしい花育を推進し、市の強みである「花」を市民が知り、楽しみ、交流することを通して、ふるさとへの誇りや愛着がふくらみ、花き産業が持続可能な花開く未来を描ける新潟市となることを目指して策定するとしています。

	資料下に「第２次計画」と「第３次計画の案」と「現状と課題、新たな視点」を記載しました。真ん中の「現状と課題、新たな視点」では、まず社会情勢の変化を挙げまして、その下に新潟市の花きをめぐる現状と課題として、本市の花き産出額や、生産者の減少、「花の産地新潟市」や「花育」の認知度の低さ、「新潟市らしい花育」の定義づけなどをあげています。その上で、第３次からの新たな視点として、花育活動にＳＤＧｓの視点を取り入れること、花の生産地である特色を生かして、新潟市らしい花育に幼少期から取り組むことで、ふるさとへの誇りや愛着を醸成する。連携、パートナーシップの強化、ネットワークづくり、デジタル技術・データの活用をあげています。 次の黄色囲みが「第３次計画（案）」です。「花育により目指す未来の新潟市」を先ほど趣旨で掲げました。産地として「花」を市民が知り、楽しみ、交流することでふるさとへの誇りや愛着がふくらみ、花き産業が持続可能な花開く未来を描ける新潟市、と仮にしています。手段として次の三つをあげました。１つめの〇人材を育成し、次の世代につなげる。２つめの〇さまざまな主体がそれぞれの花育活動をしながら、手をつなぐことにより、点と点がつながり網目のように広がって大きくなる。３つ目の〇生産者と消費者の両方に働きかける小さな活動を次々と作り上げ、育てて大きくしていく、これらが新潟市らしい花育ではという提案になっています。また、新潟市らしい花育を推進する両輪として、消費者に対しては、花育マスターなど多様な主体が活動し、新潟市らしい花育が多方面で広がること。生産者に対しては市の花の認知度が上昇し、ファンが増えて売れることにより、花き産業が振興するという、教育面と経済面の両輪により花育が推進していくというストーリーを描いています。以上が第１回推進委員会を踏まえまして、現時点での第３次花育推進計画策定の案となります。 資料２－１の２枚目は、新潟市の花を巡る好循環のイメージ図です。市民が新潟市の花について知り、次に花を買う、楽しむ、さらに花を介して地域などでの交流が生まれ、それが新潟市への誇りや愛着の形成につながり、花農家の花の生産が盛んになるという循環です。例は１方向になっていますが、多方向での効果が期待できると思っています。花を知るというところへのきっかけ作りや、花を買い楽しむことにつながるような提案をしていくことにより、本市の花育が推進し、好循環が生まれるというイメージです。 続きまして資料２－２をご覧ください。「第３次新潟市花育推進計画の施策方針（案）」です。第３次計画での施策の方向性などについて大まかに示したものです。左の枠をご覧ください。まず新潟市の花きをめぐる状況として、産業、文化、需要の別にデータをいくつか示しています。平成 26 年に施行しました、「花きの振興に関する法律」での分類に合わせまして、この３つに分け

	ています。産業では新潟市の花きの産出額が５年前と比較して約半分に減少していることや、チューリップ切り花や鉢物類の出荷量が日本一であることなどをあげています。文化では、食と花の名産品の認知度の低さ、花、花木に愛着や誇りを感じている割合が 57.9 パーセントであることや、花育マスターの登録数、食育花育センターの花育関連講座の受講者数、保育園・幼稚園・小学校の地域と連携した花育活動実施率などの数値を示しています。需要では新型コロナウイルスの影響で、切り花は冠婚葬祭需要が減少した一方で、家庭消費が増加したことや、新潟産の花を贈ろうキャンペーンの実施回数、いくとぴあ食花が初開催した新潟フラワーマルシェの参加者などをあげています。 以上を踏まえまして、主な施策の方向をご覧ください。花育推進計画の施策の方向として、花きの文化の振興と、花きの需要の増進と大きく二つに分けています。こちらも「花きの振興に関する法律」の分類に合わせたものです。第２次新潟市花育推進計画までは、施策をより細かい分類に分けていましたが、複数にまたがる事業があることや、法律が施行されたことから大きく二つの分類に分けています。 花きの文化の振興ですが、こちらは大きく３つの柱としています。１つめの柱は、こちらは公共施設および町づくり等における花きの活用です。これまで実施してきている公園や公共施設などでの緑化活動推進事業に加えまして、赤字が新しく追加した施策です。新潟駅から古町までの新潟２キロのエリアを核とした緑化イベントの開催。庁舎、学校、図書館等の公共施設での花きの活用推進。高齢者、児童、社会福祉施設などにおける花きの活用の促進をあげています。新潟２キロでのイベントとして食と花の推進課では、令和４年 10 月に食花マルシェの開催を予定しています。こちらは詳細が決まりましたら、情報提供させていただきたいと思います。庁舎や公共施設での花きの活用推進としては、３月 13 日開催の「春を感じるフラワーアレンジメント講座」で、講師からデモンストレーションとして制作いただきましたアレンジメントを、今クロスパル新潟と市長室に飾らせていただいていますが、今後も公共施設での花きの活用を進めていきたいと思います。社会福祉施設などにおける活用の促進については、花きの持つ科学的効能としまして、ストレス軽減やリラックス効果、社会性が向上する効果、認知機能の改善効果などがあり、これらのデータを元に普及推進していくことで、花きを活用した取組みが増えることを目指すものです。参考資料としまして、追加でお送りしましたＡ４横カラー両面の「花のチカラ緑のチカラ」というものがありますが、こちらはフラワーライフスタイリスト協会が作成したものです。こちらにも花の効用と、医療や福祉などへの活用について紹介されています。お時間のあるときにご覧いただければと思います。

	戻りまして資料の２つめの柱です。花きを活用した教育および、地域における花きを活用した取組みの推進です。ここには食育花育センターでの「花育」関連講座や、団体プログラムの充実、保育園・認定こども園・幼稚園・小学校での「花育」活動の実施や、「花育」推進に係る人材の育成支援と、活躍の場づくり。消費者が新潟の花き生産者や、流通の現場から学ぶ講座の開催などの施策が入ります。新たに推進する施策として、ＳＤＧｓを意識した「花育」プログラムの開発・実施というものを入れています。食と花の推進課では、令和４年度から「食と農のわくわくＳＤＧｓ学習推進事業」に教育委員会と連携して取り組みます。令和４年度は特に食に関して先進的に取り組んでいる小・中学校など５校をモデル校として、プログラム化を目指します。花育に関する取組みのプログラム化についても今後取り組んでいきたいと考えています。 ３つめの柱は日常生活における花きの活用促進です。花き生産、流通、小売店との協力による「花のある暮らし」提案展示、こちらに花きの持つ科学的効能の普及推進を加えました。先ほど社会福祉施設における花きの活用の促進でもお話ししました、花きのもたらすリラックス効果などについて、公表されている科学的データを紹介することで、日々のさまざまな生活の場面に花を取り入れて楽しむ市民が増えることを目指すものです。 次に「花きの需要の増進」の施策です。花き小売店と連携した「花育の日」「花育月間」の取組み、新潟産の花を贈ろうキャンペーンの展開に加え、ＳＮＳの活用等による消費者ニーズを踏まえた商品情報の提供、いくとぴあ食花での市民参加型の花育イベントの開催、新潟市園芸作物販売戦略会議による、園芸作物の生産拡大、販路開拓の施策をあげました。本市と農業団体等で 2021 年４月に設立しました、新潟市園芸作物販売戦略会議では、地域一帯となった園芸作物の販売促進、販路開拓の取り組みとしまして、新幹線物流を活用した首都圏への農産物プロモーションや、スマートフォンアプリを活用した、園芸農家と求職者のマッチングなどを実施しています。以上の施策により、目指すものは一番右に記載しています。産地として花を市民が知り、楽しみ、交流することで、ふるさとへの誇りや愛着が膨らみ、花き産業が持続可能な花開く未来を描ける新潟市としています。 以上が第３次計画の大まかな施策の方向性の案となります。 次に資料２－３をご覧ください。「第３次新潟市花育推進計画の構成（案）」の目次となります。第１章は「花育」の意義と効果としまして、科学的データを基にした花と緑の効能などについて紹介する内容となります。第２章は新潟市における「花き」と「花育」をめぐる現状です。１の「新潟市における『花き』の生産と消費の現状」の次に、２としまして「第２次花育推進計画の成果と課題」としまして、指標達成状況一覧、各施策の成果と課題に続きまして（３）

	花育活動の事例と効果を入れています。花育活動の事例につきましては、本日、村井委員からも紹介いただきますが、市の取組みに限らず、各方面での活動事例を紹介しまして、そこで見られる効果などについて取り上げたいと思っています。第３章は第３次新潟市花育推進計画についてです。１計画策定の趣旨としての次に、２基本理念、３花育推進施策の方向性としまして（１）花きの文化の振興、（２）花きの需要の増進の二つの方向性としています。４施策体系図の次に、５基本施策としまして、各施策の事業についてこちらで取り上げていきます。６数値目標一覧については今後関係課と話し合い、案を作成していきます。第４章は計画の推進に向けて、１各主体の役割と協働、２計画の推進体制と進行管理としています。最後に資料編です。 　資料２－４をご覧ください。施策を推進する視点です。今ほどの目次の第３章１の（５）の案になります。1、連携・パートナーシップの強化につきましては、「花きの振興に関する法律」においても規定されています。市民、民間事業者、花き関係者、県、教育機関など多様な主体と連携協力できる関係性を構築し、パートナーシップを生かして花育を推進しますとしています。２、ＳＤＧｓの達成に向けた取組みとしまして、本市の花育を通して、各目標の達成に貢献できるよう取組みを推進していきます。次のページ、花の産地新潟市の認知度向上による誇りと愛着の形成です。若い世代の東京圏への流出が市の課題となっている中で、若者の東京圏への流出を抑えることや、本市を離れてもふるさとを応援する人材に育ってもらうためには、子供の頃からふるさとへの愛着や誇りを持つことが重要と考え、本市の強みの一つとして、花の産地新潟市の魅力を知ってもらうよう、認知度の向上に取り組みますとしています。４、デジタル技術・データの活用です。新型コロナウイルス禍で会議やイベントなどのオンライン開催が増え、また学校におけるＩＣＴ環境の整備も進みました。このような社会の変化を踏まえてＳＮＳ等による効果的な情報発信をはじめ、デジタル技術を活用した花育の取組みを推進していきます。また花きの有するストレス軽減や、社会性の向上、認知機能の改善などの効用に関する科学的データを活用した知識の普及を推進し、高齢者や児童、社会福祉施設などでの花きを活用した取組みや、職場や家庭などでの日常生活において、花がある暮らしを楽しむ市民が増えることを目指しますとしています。以上４つを、施策を推進する視点としています。 　次の資料２－５ですが、こちらは策定のスケジュール案です。１点訂正をお願いいたします。第２回推進委員会が２月となっておりますが、３月に訂正させていただきます。次回の花育推進委員会ですが、７月か８月頃を予定しております。本日のご意見を踏まえまして、関係課と調整し、数値指標の案を含めまして、計画案を作成しまして、次の推進委員会でご意見をお伺いしたいと思

	っております。以上駆け足で説明させていただきましたが、まず第３次計画の策定の趣旨や、施策の方向性が重要と考えております。趣旨や施策の方向性は現段階でのたたき台となりますので、委員の皆さまからご意見やご提案などをお伺いしたいと思います。本日いただいたご意見を基に策定作業を進めていくことになりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
中野会長	ありがとうございました。それではただ今ご説明いただきました議題２につきまして、質問やご意見等ございましたらお伺いいたします。これは非常に重要な内容ですので、今の説明にあったような、策定の趣旨ですとか、施策の方向などについて、ぜひご意見をお願いいたします。できれば委員全員からご意見をお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。
中野（節）委員	よろしくお願いします。お疲れさまでございます。大丈夫でしょうか。聞こえていますか。
中野会長	大丈夫です。
中野（節）委員	すごく盛りだくさんでしたので、多分これ皆さんがいろいろなところに引っかかって、内容に引っかかって多分てんでバラバラなので、１点だけと思います。私は最初に三本柱の人材育成と、さまざまな主体で活動すると、生産と消費者にフォーカスすると、この３つが大きな柱になるかと認識しましたが、間違いはないでしょうか。
事務局	大丈夫だと思います。
中野（節）委員	大丈夫ですか。ですので、一応その人材育成というところで、なにか皆さんの中で、どういう形で人材を育成していったらいいのかというご意見があるといいと思います。 実は南区の公民館の人から提案を受けていまして、いわゆる花のある生活を楽しむ提案を何か中野さん達やってくれませんかといわれまして、いろいろ県外の案などを見ていきましたら、マスター勉強会みたいな会が、お花のプロになろうという、本当のプロフェッショナルではないのですが、少し教えられるようなレベルのお花のマスター研修というのがありました。それはどうですかと提案しましたが、フォーカスする年齢が高齢者でしたので、それは没計画になりましたが、人材をどこから発掘するかというところは、市としてはどういうふうに考えていらっしゃるのか。アットランダムに全部の人を対象に人材育成するのか、それとも本当のプロフェッショナルの人達だけにしていくのか。どういう方向性がいいのでしょうか。
事務局	そうですね。ここで人材育成とあげているものが、花育マスターの活用ですとか、研修という形であげていまして、一般向けというところではあがっていないのですけれども。
中野（節）	わかりました。では今いる花育マスターの研修ですね、レベルアップという

委員	ところですか。
事務局	そうですね。活躍していただく場をまず作っていきたいですとか、そういったところを少し強化していきたいというふうには思っています。
中野（節）委員	たとえば、消費に促すとか、消費につなげるとか、もっと販売拡大していくためには、既存の花育マスターだけだと広がらないですよね。そうなると、もっと新しい掘り起こしも必要になってくるのではないかと思いますが、いかがなものでございましょうか。
事務局	今、生産、教育面と、経済面と二つの柱を一応仮に立てさせていただいているわけですが、今までどちらかというなら教育のほうに非常に軸足を置いた形の計画になっていましたので、花育マスターもそちら寄りのものになっていたと思います。今後新しく生産、生産現場を支えていく意味で経済という新しい視点が、割と新しく入ってきたのかなという感じがしますので、それにつきましてはこの計画を作っていって、その先の施策として、ではどういうものが必要なのかという段階で考えていく必要があるかと思っております。貴重なご意見ありがとうございます。
中野（節）委員	わかりました。
中野会長	中野さんよろしいでしょうか。
中野（節）委員	はい、ありがとうございます。
中野会長	ありがとうございます。 他の委員の方々ご意見いかがでしょうか。
事務局	北澤委員から手があがっています。
中野会長	よろしくお願いいたします。
北澤委員	北澤です、よろしくお願いします。私も少し人材育成の点で、花育マスターを育成されることに重点を置かれていると今伺いましたが、たとえば生花店の店員さんの若い方に勉強会を設けるとか、そういうところで花の効能を生花店の店員の方がお客様に教えることが出来るというふうになっていただけたらいいなと思いますので、ご検討いただければと思います。
事務局	先ほどの中野委員も、今の北澤委員もそうなのですが、非常にこれから我々になかった視点ですので、ぜひご意見として取り入れて、本当の施策の時に検討するアイデアとしていただきたいと思います。ありがとうございます。
中野会長	いかがでしょうか。 村井さんお願いいたします。
村井委員	資料２－２の花きを活用した教育および地域における花きを活用した取組みの推進とあったところで、後で小須戸小学校のボケの取組みの話をさせても

	らいますが、近年やはり特に小学校が、中学もそうですが、花とかかわっている時間が、なかなか授業的に取れていないというのが、総合学習という時間もあるのですが、それがなかなかうまく取り入れられていないなと。私はコーディネーターをしていて最近思っているものですから。この辺はやはり花育だけでなく、教育委員会との、教育委員会の授業のカリキュラムは文科省が決めていることですが、そういうものも学校で取り組みましょうという、ある程度のプログラム的なものを提案してあげて、学校でやったらどうかというほうが、提案をしてあげると幼稚園ができるものもあれば、小学校ができるのもある。特に中学はまったくほとんどそういうものが、小須戸は、中学はたまたまそういう機会があるので取り組んでいるのですが、他の中学校は花を植えることは簡単なのですよ。ベゴニアとかそのシーズンだけのもの。それの維持管理とか、そういうものはなかなか地域とのコミュニケーションを取っておかないと継続的に出来ないというのもありますので、そういうところもどこかで提案できると広がっていくと。その子供たちがやはり花を思わないと、次の購買意欲にもつながっていかないから、お花屋さんも売れないし、それきりということになりますので。本当にこれだってうまく取り組んでいかないと、せっかくやった部分が購買欲につながっていかないとダメなのかな。ですからその左側に書いてある年間購入額が 8,223 円というのが高いとみるのか、低いとみるのか。私は全国平均がわからないのですけれども。単純に考えて私の家に仏壇があるから、仏壇の月の花を花屋さんで買って、年盆とお参りいくようなことを考えると、もう少し高くてもいいのかと思いました。そういうところももう少し目標数値を目指してやってはどうかと思いました。
中野会長	ありがとうございます。 市のほうはいかがでしょうか。
事務局	今実は食育推進計画というのが、この４月から始まるのですけれども、同じようなＳＤＧｓの持続可能な農業という視点でやっていまして、先ほど言いましたＳＤＧｓを目指して、ＳＤＧｓに関係する食に関するプログラムを教育委員会と一緒に作ろうとしているところです。ですので、花もまったく同じ構造ですので、子供たちへの花を育むという教育ももちろん大事ですが、消費者として、消費者教育みたいな部分の切り口で、この花育を捉えていくというのは非常に重要だと、今、村井委員のおっしゃったとおりだと思いますので、そこは教育委員会と連携して数値目標も含めて今後検討していければと思います。ありがとうございます。
中野（節）委員	先ほどのＳＤＧｓの話ですが、どういうふうにして花産業とＳＤＧｓがかかわっていったらいいのかと私も１年くらい考えていますが、いろいろなところでアナウンスすると、ロスフラワーということに関する一般市民の意識がとて

	も高いと思っています。いろいろな業界の人と、ロスフラワーの使い方、どうやったらいいのだろうかという話をさせていただくと、本当に異業種の人たちがいろいろな提案をしてくださるので、今後も、もし新潟市がそのＳＤＧｓと花ということを絡めていくのだとしたら、一つターゲット、ＳＤＧｓといってしまうとすごく広すぎてしまうので、たとえばターゲットを絞ってロスフラワーであるとか、それをどうやったらいいですかというような提案の仕方をしていくと、とてもいい意見がたくさん出てくると思います。逆に中学生あたりはどんどん言ってくるのではないかと思います。実際私は保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校といろいろ花でかかわるのですが、本当にただ単に花と遊ぶというのは、喜ぶのは小学校の低学年レベルまでです。そこに未来とか福祉とか環境ということを、少しエッセンスを入れてあげると、いわゆる年齢の高い子供たちなどはすごく食いついてきてくれるので、そこがやはり人材、花育マスターのレベルアップを図るというところになってくるのかと思います。 　ただいっぺん花の植え方を教えて終わりとか、ただいっぺんアレンジメントを教えて終わりだけたと、はっきり言って魅力はないかと。新潟の花育マスターのレベル、新潟の花育マスターに聞くと福祉の話から環境の話から何でも出来てしまうんだよねというようなものがあると、また少し新潟を見る目が変わってくるかと思いますので、その辺も考えていただいてＳＤＧｓよろしくお願いいたします。
中野会長	ありがとうございます。いかがでしょうか。市から今のご意見。
事務局	非常に参考になりました。結局小さい頃から大人に、消費者になるまで切れ目のない教育というのが花を支えていく上で非常に大事だろうと思っていますので、その切り口として花育マスターの制度を拡大するほうがいいのか、また新しい何かそういう民間の方とのかかわりの中でやっていくほうがいいのかというのは考える必要があると思いますが、そういった視点は本当に大事だと思いますので、ぜひ取り入れたいと思います。ありがとうございます。
中野（節）委員	すいませんパラパラで。また花産業とかかわっているのですごく問題点がたくさん見えてきますが、売上げが半分になったのは事実です。卸業としても資材が売れないので、そこのところは本当に半分になったなと思っています。ただ、生産者自体がやめているので絶対数が足りないのですね。たとえばチューリップの球根も国産はもう足りなかったり、欲しい花が買えなかったり、県外から注文がくる、いわゆる花木、園芸用植物がもうないから売れないというのが本当に現実なのです。そうなるといかに農家を守っていくのかというところを両輪でやっていただくと、生産も安定して、消費も安定。消費のほうばかり走っていってしまうとものが足りなくなってしまうので、価格破壊も起こってきてしまうと思います。ですので、うまくバランスが取れるように進めていた

	だきたいと思っております。売ることも大事ですが、作っていくこともとても大事なことなので、偏らないようにして、でもメンバーがすごくバランスがいいので期待できると思っています。本当に農家を守っていかないと新潟は大変なことになってしまいますので、そこのところも皆さんご協力よろしくお願いいたします。すいません何度もしゃべりまして。
中野会長	ありがとうございます。いかがでしょうか。 少し私からよろしいですか。いくつか胸にくるところがあります。資料２－４の３番、花の産地新潟市の認知度向上は、非常にこれから重要だと思うのですよね。今小学校などの授業で、こういうことを教えるような授業というのはあるのですか実際。
事務局	アグリスタディプログラムでは、花のプログラムは一部ありますが、多分ほとんど使われていないです。あと、阿部委員からご意見いただければと思いますが、アグリパークでもそんなに花というプログラムはなかったですよね。
阿部委員	そうですね。その取り立てて特別にやるというプログラムがなくて、でもたとえば小学校３年生で新潟市の勉強をするときに、新潟市の南区ではこういう農業が盛んでこういうのを作っている、新津では花きがというその土地の特徴にあった産業を勉強するというのは、日本中どの学校でも必ずやることで、もちろん新潟県新潟市でもやることで、新潟市の勉強をする３年生がそういうところを元に、自分たちの南区は梨を作っているのだなというのがあるので、そういう勉強の中で、新潟市秋葉区は花きをたくさん栽培しているとても有名なところになるので、そこの学校ではそういう勉強をしている。というのが学習指導要領の中に位置付けられている、新潟市の花きの認知度を上げるところにつながっていると思います。ですから、もともとあるものをさらに充実するというのも大事だし、アグリスタディプログラムのように、やはり新潟市独自のものをもう少し総合的な学習や生活だとか、あるいは社会科に関連付けるということ、そういう方法もあるかと思います。学校いろいろ教育が盛りだくさんにありますので、上手にそこを取り入れていくということが必要かと思います。以上でいかがでしょうか。
中野会長	ありがとうございます。私は実際どのようにやっているのか存じないものですから、なんとも言えませんが、たとえば市全体で花にかかわらずいろいろなことを、要するに新潟市はこういうものだよということが分かるような、そういう動画などを作っていただいて、たとえばそういう授業の時に活用していただくとか観られる。やはり個々の先生が説明するのは大変じゃないですか。内容も違ってくる可能性もありますし。そういうこともあってもいいのではないかという気がします。場合によってはオンデマンドでそれを見ることが出来るようなシステムとか、今の時代には合っている感じがします。

事務局	ありがとうございます。教育委員会と協議が必要になってくると思いますが、今、実は去年コロナの補正事業で、チューリップの生産から出荷までの動画を作って、販売促進とか就農につなげるためのプロモーションとして作ったものがあって、こういうふうに作られて、こういうふうに流通していくんだというのが分かる５分くらいの動画がありますので、そういったことも活用の一つとして出来ないのかどうかというのを協議させていただきたいと思います。なかなか、教育委員会もすごく詰め込まれているので、授業がお忙しいとは思いますが、お話はしてみたいと思います。ありがとうございます。
中野会長	他いかがでしょうか。ぜひまだご意見いただいていない方、ご意見伺いたいと思いますがいかがでしょうか。
事務局	青山委員から手があがっています。
中野会長	よろしくお願いいたします。
青山委員	第３次計画の教育面と経済面の両輪をというふうに書いてありますが、新潟というところを考えたときに、新潟が花も作っている、とても多く作っている産地だということを知っている人がどれだけいるかということがありまして、それが、それこそこれからの教育になっていくのでしょうけれども、他のところでは、子供たち、とても難しいと思いますが、生産の場所に行くというような、疑似体験みたいなことはお花の場合はとても難しいのでしょうか。よくお米などだと、それこそ小学校で産地の近くだと自分たちで１年かけて育てて刈っていくことがありますが、なかなかお花はそういうのが難しいかもしれませんが、アグリパークなどで少しお花の畑に入って、園児などだとそこに入って自分で摘み取って、切り取ってそれでまたブーケを作るというような、自分がかかわっていく。作っている、本当に作られているそこにかかわっていくような経験を積まないと、なかなか生産というところまでは意識がいかないような気がして、一つ自分でそういう経験をすると、街の中のお花屋さんでお花を見たときにも、これはあったお花だねという話が、聞いたお花だねというところにつながっていくので、その生産の場と子供たちをつなぐというところは、私ども実は難しいのかどうかが分かりませんけれども、そういうことが大事なのではないかと思います。
事務局	実は来年度食と花の推進課で生産地を子供と一緒に巡るバスツアーというのを１年間に２回ほど開催したいと考えておりまして、市の生産している現場を見たり、市場で競りを体験したり、そういう生産の現場と流通の現場がこういうところにあるんだよというのを少しでも知っていただきたいという思いがありまして、来年度２回ではありますが、予定しているところです。今まで秋葉区で生産地を巡るバスツアーは開催されてきたと思いますが、今コロナ禍で難しいというところですが、直接現場にスポットを当てたいということを思

	っておりまして、なかなか全員というか小学校など学校単位では難しいかもしれませんが、そういった機会を増やしていきたいと思っております。
中野会長	青山さんよろしいでしょうか。他いかがでしょう。 玉木さんよろしくお願いいたします。
玉木委員	市場のほうから、現状とあったことをお話させていただきます。 2020 年のコロナから、花の需要が、2020 年の４月、５月、全くなくなってしまった時期があって、それによって生産者も花が売れないということで、やめる人や、ちょうどよく高齢の方も、これを機会にやめるという格好で、新潟市の周りの、大淵や北山、曽野木近辺はみんな年齢とともにやめて、ほとんど作らなくなってきているという現状です。 竹尾も昔からの産地で、結構全体的に若い人がやっておったのですけど、やはり造成にかかって、皆さん、これを機会にやめていったという現状で、新潟市近郊にすれば、もっと、100 あったものが 10 あるかないかくらいの出荷量になっている現状です。 コロナ前、2019 年の市場の取扱が 100 だとすると、東京のほうは 2021 年には売り上げは戻ったのですけれども、地方の卸売市場はまだ回復していなくて、やはり 90 パーセントくらいの回復しかしていないという現状です。 今、市場としても危機感を持っていまして、全国の市場の皆さんと勉強会をしているのですけれども、その中でＳＤＧｓとも関係しているのですけれども、新潟のチューリップが減少しているという話題になったら、暖房費やいろいろ資材が値上がりしていて、なかなか思ったようでない、手取りも少なくなっているというお話をしたのですけれども、チューリップという花の生産に関しても、将来的に暖房、油をどんどんたいて生産していって、それを消費者が納得して買ってくれるのかどうなのかというところまで踏み込んで、ちゃんと市場も考えておかないと。むやみやたらにこの時期にチューリップがほしい、生産者に作ってくれということ。この時期にバラを暖房して作ってくれということは、もっと考えてからいわないと、市場としても置いていかれるのではないかというような話がありました。 それから、やはりチューリップも最低の暖房が必要なのですけれども、チューリップの生産者に聞くと、やはりもう何十万もたいているということをおっしゃいますし、ここにきて、今年、チューリップ、いい値段していますけれども、これでも他の肥料や農薬や人件費というようなものが高くなっていますので、手取りは今年と変わらないということをおっしゃっていました。 やはり、花の産地であった新潟が廃れるということが一番悲しいことなので、なんとか若い人から花を作っていただけるようにできないのかなと思っています。

	あとは、国の金を少し入れていただいて、今は試験で、チューリップ、切り花の品種が市場にしか流通していないのですけれども、ガーデン用の丈の短いチューリップを、球根付きのまま切り花として中央で流通できないかということで試作をしています。もうすぐ咲いて、出荷というか、売ってはいけないのですけれども、アンケートを取る予定です。全国市場に少しずつですけれどもばらまいて、お花屋さんにみていただいて、アンケートが、丈が短くて球根の付いているチューリップが切り花として価値があるかどうかということを、今、探ろうかなと思っています。市場は以上です。
中野会長	ありがとうございました。事務局のほうから何かありますか、ただいまのご意見に関しまして。よろしいですか。
事務局	はい、大丈夫です。
中野会長	それではそろそろ時間となりますので、このあたりで２番目の議題については終わりにしたいと思います。 続きまして、（３）の花育に関するアンケートの実施について、事務局のほうから説明をお願いいたします。
事務局	花育に関する二つのアンケートの実施案について説明させていただきます。 資料３－１差替のほうをご覧ください。こちらは、令和３年度花育活動の実施に関するアンケートの案です。 毎年市立の保育園、幼稚園と小学校を対象にアンケートを実施していますが、令和３年度の花育活動に関するアンケートは、私立も加えまして、市内の保育園、認定こども園、幼稚園、小学校、特別支援学校に対象を拡大して実施したいと考えています。内容については、赤字が新たに加えた部分です。 問１では、注釈としまして米印のところ、このアンケートにおける「花育」活動とは、各校・園の授業、行事や日常生活で、児童・園児が観賞用に植物を植える・育てる・飾るなど、直接「花や緑」に触れる活動とします。小学校の生活科・理科の授業で学習指導要領に沿って実施する植物の栽培は含まず、それ以外の活動について回答いただきますとしています。 問２は、連携先に令和２年度のアンケートで多く回答された項目などを追加しています。 問３は活動の目的についての問です。平成 20 年に第１次花育推進計画を策定するため実施しましたアンケート調査の問を採用しまして、選択肢に赤字の、ク．環境問題への関心の高まり、などの項目を加えました。 問４は、花育活動に係る課題について。ア．活動に関するノウハウがない、の他に赤字の部分、キ．地域連携のノウハウがない、ク．専門的指導者がいない、の選択肢を加えました。また、令和２年度の回答で多かった、ケ．教育課程への位置づけが難しい、コ．新型コロナウイルス感染症の影響で地域との連

	携が難しい、などを選択肢として加えています。 　問５は花育マスターの活用について、学校・園での花育活動に活用したいと思いますかと、またその選んだ理由を書いていただく問として、新たに設けました。 　問６は自由記述欄となっています。 　こちらの様式で、４月に入りましたらアンケートを実施したいと考えています。 　続きまして資料３－２の差替のほうをご覧ください。令和４年度市政世論調査の希望テーマ調書となります。市政世論調査は、毎年各課が提出した希望テーマ調書の中から幾つかのテーマが採用されて実施されます。 　第３次花育推進計画策定の基礎資料とするため、「新潟市の花や花育について」を希望テーマとして提出いたしました。採用された場合は、４月頃に質問内容を確定することになります。予定として提出しました質問について説明させていただきます。 　問１は、花や植物に関する最近１年間の行動をきくものです。問２は、コロナ禍で花や植物への関心が高まったかどうかをききまして、高まった、どちらかといえば高まったと答えた人のみに、問３で、コロナ禍での花や植物とのかかわりについて、あてはまるものを選んでいただきます。 　問４は、花の産地の認知度についてです。新潟市は花の生産が盛んで、市の花であるチューリップ切り花の出荷量は、全国市町村の中で第１位、アザレアやボケなどの鉢花の出荷量も第１位です。あなたは、新潟市が「花の産地」であることを知っていますか、としています。 　問５は、花育の認知度についてです。問６は、花や植物や花育に期待する効果について、３つまで選んでもらう形にしています。問７は、花の産地である新潟市らしい花育として取り組んでほしいことを３つまで選んでいただくような形としています。 　簡単ですが、今ほど説明させていただきました二つのアンケート調査につきまして、委員の皆さまからご意見などございましたらお聞かせいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
中野会長	ありがとうございます。ただいまの説明に関しまして、質問やご意見がございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。 　よろしいでしょうか。特にご意見、ご質問等ございませんようですので、先に進みたいと思います。 　それでは、（４）令和３年度花育俳句優秀句選考について、説明をお願いいたします。
事務局	令和３年度花育俳句につきまして、この場をお借りしまして、委員の皆さま

	に最終選考、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。無事に選考、決まりまして、お送りさせていただきました資料４の裏面に、最終選考句が載っているのですけれども。今年も無事に終わりましたので、ありがとうございました。 今回は、令和元年度から始めまして３回目にあたったのですけれども、もう少し新潟市の花をアピールしたらどうかという意見のありました中で、今回、チューリップ、ユリ、アザレア、ボケの４部門としてお題にさせていただいて募集を行いました。その結果、令和２年度、前年度を上回る人数と俳句数が集まりました。 今回は、新潟県花き振興協議会と新潟県花木振興協議会にも協賛いただきまして、優秀句に選ばれました優秀者の皆さまにお花をプレゼントすることができました。今週中くらいには皆さんのお手元に届く予定になっております。また、昨日、新津第一小学校と江南区の大淵小学校は、学校単位で応募いただいたので、そちらで優秀句に選ばれた生徒向けには、昨日アザレアの新品種のスノーシャインを届けてまいりました。先生も、立派なお花をいただけたということで、大変喜んでいただきましたので、またこれが次回に続いていけばいいかなと思っております。 それで、今後の俳句に関しての予定なのですけれども、まず今月中、応募作品 1,205 句については、ホームページで作品集として掲載させていただきます。また、今月末になるのですけれども、花育通信には優秀句、全 24 句を掲載したものを発行予定でございます。 今回、また新たにほんぽーと、中央図書館になるのですけれども、そちらのエントランスに４月７日から５月 12 日まで優秀句、期間が長いので他の句なども展示をさせていただくことになりましたので、さらに多くの方に目にしていただき、次回に向けてのピーアールにもなると思っております。 以上になりますが、委員の皆さまに今回選考していただいた中で、ご感想などをいただければと思います。よろしくお願いいたします。
中野会長	ありがとうございました。委員の皆さまには選考にも携わっていただいたのですけれども、何か感想等ございましたらぜひよろしくお願いいたします。 なかなか、個人的には小学生のものは、視点も面白いですし、素直な感じがして、非常に心に残りました。皆さまのほうで特にご感想がございましたらお願いいたします。
阿部委員	今回、初めて俳句の最終選考に参加させていただきましたけれども、選ぶのがなかなか難しくて、どの句にもその方の花に関する思いが表れていて、とても選ぶのが難しかったなと思ったのですけど。私は私なりに、新潟の花をアピールしているなとか、情景が浮かぶなというようなものを選ばせていただきま

	したが、こういうのを読むだけでも癒やされるなということがあって、花育の効果というものも少し感じたかなというところです。以上、感想ですけれども、参加させていただいてありがとうございました。
中野会長	同感です、私も。他、いかがでしょうか。
村井委員	多分、私第１号にファックス流したのではないかと思うくらいに、回答が早かったと思うのですけれども。実は、メールで来たものですから、家内と全部読み合わせて、家内も選考委員の一員となって、夫婦で話しをして送らせてもらって、本当に家内もなかなかいい俳句多いよねという話もいっていたものですから、本当に小学生でもレベルが高いものを作るなと感じたものです。国語の授業も含めて、ぜひ続けてやったほうが。やる学校もやらない学校もあると思うのですけれども、いいのではないかなと感じましたので、継続してやっていただけたらいいかなと思いまして、ご報告させていただきます。
事務局	実は、令和元年度、小学生の募集がたった 18 人だったのです。それが、今年３回目を迎えまして 183 にまで、ほぼ新潟市内の小学生の応募が増えてきているので、これからも俳句を通して花育をするとなるとは思うのですけれども、継続して小学生にどんどん参加していただけるように、こちらもピーアールを頑張っていきたいと思います。ありがとうございます。
中野会長	他いかがでしょうか。 それではここで５分間の休憩とさせていただきたいと思います。今、13 分ですので、20 分から再開したいと思いますので、ご準備をお願いいたします。
	（休　憩）
中野会長	それでは、時間となりましたので再開させていただきます。 続きまして、３の事例研究です。村井委員から説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。
村井委員	皆さん、こんにちは。改めまして。小須戸小学校と中学校の地域教育コーディネーターをやらせていただいておりまして、小須戸小学校のボケの取組みを発表させていただきたいと思います。先ほど、市の方針もあったのですけれども、これにすべてのことが盛りだくさん課題も載っているのではないかということであると思いますので、そう思いながらお聞きいただければありがたいと思います。 これからの説明内容なのですけれども、ボケ栽培を始めたきっかけ。地域の特色を活かした取組み。地域の協力。児童の意識と課題。現在の進め方。ボケ栽培からの発展。まとめ。この七つの順番に沿いまして、今日、皆さんにご説明をしていきたいと思っております。 最初にボケ栽培を始めた、学校関係者ですと制度というか、そういうものがよく分かるのですけれども、教育委員会から平成 22 年度にオンリーワンスク

	ールという助成金を２年間頂戴しまして、22 年、23 年と、小学校４年生から６年生までが一人一鉢で、ボケの苗木を買い、植える鉢を買い、児童に配付という形で進めさせてもらったのが最初の取組みになっております。 その後名称が変わったのですけれども、地域と学校ドリームプロジェクトという補助金をもらいながらスタートしていったというのが、小須戸小学校の取組みです。予算配当というよりも、学校の提案で市から認められて、小須戸小学校に予算をつけるよという形で、提案をしていない学校には予算はいっていないということなので、当時、小須戸小学校はこの予算を申請してもらったということになっています。 地域の特色といたしましては、小須戸地区は、皆さんご承知のとおり日本一のボケ生産地であります。例年ですと、３月第１週に日本のボケ展ということで、大々的にボケの展示販売をしていたのですけれども、今はコロナ禍なもので、今年は実施しなくて、残念ながらボケの展示販売はなかったです。これは、全国から買い物にきていただける大きな販売会になっております。 そういうことで、地元にボケの栽培を指導できる方が大勢いらっしゃるものですから、そういうところで総合的な学習の時間として３年間、４年生、５年生、６年生ということで、小須戸の名産であるボケを育てましょうということで進めていきました。 地域の協力といたしましては、先ほどいいましたように、事前学習に、まずボケ協会の方から、ボケについて話をしています。ボケというと年寄りのボケばかり感じるのですけれども、花のボケです。それに対して、事前学習で児童が、栽培したどの花、何百種類もあるものですから、どの種類がいいかということで、最初から３種類のボケの花の提案をいただきまして、それを子どもたちから事前学習の説明を受けた後、選んでもらうと。実際に選んだ花を見に行こうということで、先ほどいいましたように、現地見学、学校から歩いて 15 分くらいのところに日本一のボケ公園がございますので、そこに子どもたちと一緒に行って、そこで実際のボケを見る。そして５月の連休後に学校でボケを植えるという形で進めております。事前にボケ協会の方からいただいて、子どもたちに、ボケの花を持ってきていただいて、こういう花だよという話を聞きながら、ボケの話をさせていただいております。 その時に３種類の花の咲いた状況の写真も見せていただいて、どれを育てたいということも、そこまで説明を受けて、後日自分が育てたい花を選ぶという形で実施させていただいております。 実際に、ボケの実で作られた、学校で作ったボケの実ではないのですけれども、業者がボケの実で作ったボケジャムを実際に食べられるものですから。ボケは、見る楽しみ、育てる楽しみ、食べる楽しみがあると、そういうボケの話

	を聞かせていただきまして、実際に説明が終わったあとにボケジャムの試食会を子どもたちにしていただいて、意外に美味しいんだねという形でボケジャムを、生徒から食べてもらっております。 　先ほど言いましたように、実際にボケ公園に見学に行きましょうということで、小須戸にある「うららこすど」という、外れの方なのですけれども、そこに日本一のボケ公園がありますので、現地見学に行って、再度ボケのこういう花が植わっていますよというお話を聞いて、子どもたちに写真を撮らせて。今でいえば、ｉＰａｄでしょうかね、それに写真を撮ってきてボケを観察してという形になります。 　実際に植える時、ボケ協会の方から学校に来ていただきまして、子どもたちのところにご紹介をさせていただいて、ボケを植える時の注意事項ですね、そういう説明をして、このように用土とみんな混ぜて、こうやってボケを植えるのだよという形でボケ協会の方がご指導いただきまして、子どもたちと一緒にボケの花を植えると。これが小須戸小学校の取組みになっています。ただ、植えても、どうしても春と秋に剪定をしなければということで、５月上旬と 12 月初めに、毎年来ていただき、４年生が植えて１年後、冬にもやるのですが、翌年の春で大きくなった５年生、６年生を集めて、ボケの剪定の仕方を指導しているところです。こうやってはさみでぼけの花のところを取ったほうがいいよとか、そのような、実際にボケの剪定の指導をしていただいております。 　これも同じように、子どもたちがはさみを使って取るのだけれども、まだまだ取れていないところを、こうやって取ったほうがいいよという形で、地域の方がボケの剪定の部分を指導していただいているところです。これも同じですね。子どもたちによく見えるようにして、やっていただいております。 　小須戸小学校も玄関前に、ボケの大きな花になっているので、いつも授業が終わったあと、ボケ協会の方が玄関前のボケの手入れをしていただいて、またきれいな花が咲くようにということで手入れをしていただいております。 　児童の意識として、課題といたしまして、結局、学校は月から金来ていればいいのですけれども、夏休みですか、そういうときに家に持っていかせたりするのですけれども、夏場や天気のいい時期に、特にボケは水やりが大切なものですから、４年生は毎日朝来て、一生懸命水やりをする生徒がいるのですけれども、だんだん上級生になっていくと面倒くさがって水やりをしないと、そうすると栽培途中でボケを枯らしてしまうと。あるいは、世話が不十分で、クラスが仮に 40 人栽培しているとすると、２割くらいは枯らす生徒がいたりなど、手入れのいかない子がいるものですから、学校も先ほどいったように、市の予算等も減少してきたものですから、方向性を変えようということで、今では、総合的な学習の時間、特に今年はコロナの兼ね合いもあったので、年間６時間

	計画でボケをやりましょうと。ボケの植え込みは、維持管理の面を考慮して、一人一鉢ではなくて、クラス全体で６鉢育てましょうと。 　そういうことで、地域貢献活動として、小須戸の花ということで、ボケを育てていき、自分たち４年生が育てたものを、翌年の４年生に維持管理してもらおうということで、ボケ育てを次年度４年生が管理を引き継ぐといいう形で、２年前からこのスタイルに変えています。 　そうしますと、先ほどいいましたように、ボケの花は見る楽しみ、育てる楽しみ、食べる楽しみがあると。そういうボケの実を活用した次なる展開を授業に活かそうと。総合学習の中の展開としては、花育という言葉を使ってしまえば花育だけれども、花育から、今度ボケの実を使った食育につなげようということで、ボケの実を使ったスイーツの提案。地元のゲオルクというクッキー屋があるのですけれども、そこと連携をして、実際に授業にきていただいて、ボケクッキーなどの試作を作って、ボケから次なる授業の展開を組み入れていきました。 　これが実際にお店屋さんとタイアップして、ボケの実を使ったボケのクッキーだから、ボケッキーという名前をつけて、地域の人に販売をさせてもらったのが、今から６年くらい前かな。あとで写真を撮りましたけれども、新潟駅の構内、ＣＯＣＯＲＯの前まで持っていって、小須戸小をピーアールさせていただいて、学校で作った米とボケッキー、あと地元のお菓子などを、子どもたちと一緒に販売して、いろいろな小須戸小学校をピーアールできたのではないかなと思っております。 　まとめといたしましては、地元小須戸の日本一を誇るボケの花について栽培する活動を通して、子どもたちに伝えていくと。地域教育の中の一つです。ボケ協会に加え、小須戸小学校に緑化ボランティアという方が 13 名在籍していただきまして、４月から 12 月上旬まで月２回、校地内の花の管理や児童玄関前教材園の草取りなどをして、とても協力をいただいています。特に、子どもは地域の宝ということで、地域の人も一生懸命学校とともに活動していただいております。これが緑化ボランティアの方が校地内の落ち葉を拾ってくれたり、畑の草取りをしたり、地域協力をしていただいているところでございます。 　簡単ではございますが、以上で私の説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。
中野会長	ありがとうございました。ただいまのご説明に関しまして、質問や意見等ございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。 　中野のほうからよろしいですか。 　ぜひ、お子さんの反応を聞かせていただきたいのですけれども。
村井委員	ボケという花を、実際、地元でずっと、大人は知っているのだけれども、子

	どもたちが知るというのは、やはり学校に入って４年生の授業で、ボケという花を初めて知るのです。名前を聞いていてもみることもないし、あるいは、こういう育て方をするのだな、ということもあるものですから。そういう意味で、小須戸の特徴ある話の中で、ボケの花が日本一なのだよということを知るというのが、まず教育の中で第一歩だと思いますし。あるいは、そこからの展開として、現実、ボケ公園を見に行くとか、そういう意味では、子どもたちの地域教育を教える中で大事なことだなと思っています。 　あとは、もう一つ次のステップで、先ほどいいましたように、食につながる部分ですね。そういうところも、学校の授業のカリキュラムの中で、そういうことが子どもたちの提案でこういうものを作ったら売れるのではないかとか、地域がよくなるのではないかということで、授業の取組みとしては、大変うまくいっているのではないかと思うのですけれども。 　私は、本質的には、やはりクラス１つではなくて、一人一鉢ずつやったほうが、育てる大切さですね。やはり他人ごとになってしまうとまずいなというところが大変あって、やはり一人一鉢で育てたほうがいいのではないかなとは、私は思っていますけれども、学校の都合もあるし、予算の都合もありますので。一応、そういうところに思っていますけれども、子どもたちにはいい経験をさせているなと思っています。以上です。
阿部委員	とてもいい発表をありがとうございました。今、中野会長もおっしゃっていたのですけど、これをやった時の、子どもがどんなことを、やったあとに、ああよかった、のようなことを言ったとか、俺たちのところってこんなものがあるのだとか、子どもの反応とか言葉というので、何かご記憶にあるものはありますか。
村井委員	実際の生の声を聞くということは、私はないのですけれども、お礼状をボケの指導者や説明の方に書いて、私が当然お届けにいくのですけれども、逆に子どもたちの声は、ボケを知るということです。子どもたちは小須戸の名産であるボケを知るということ、ここがまず一番新しい覚えることだと思っていますし、ボケ協会にしてみたら、地域のことを覚えてもらうということが大変うれしいようで、そこがお互いにマッチングしていて、地元の子どもであれば、小須戸の名産は何だと聞くと、ボケと言えるようなことができるようになればいいかなと思っていますので、子どもたちはとにかく、ボケの花を分かることが第一であって、あとは育てる難しさも感じられるというのがあると思いますので、そういうところかなと思いますけれども。
事務局	すみません、事務局からよろしいですか。現在は一人一鉢ではなくて、クラス全体で６鉢育てているということなのですけれども、それを次年度の４年生が管理を引き継いでいくということは、学校にずっと置いてあるものを子ども

	たちが管理していくという感じになるのでしょうか。
村井委員	そうですね、ボケは鉢に植えてしまって、水さえしっかりやっておけば枯れることはないものですから。冬場は違うところに移動しますけれども、また春先に出して、また剪定をしてという形で、ずっと回していきます。そうできますので。 本当に、管理をするというのが大変なところだから、そこが水やりをしっかりやる、あるいは追肥をしっかりやるということです。
事務局	引き続いて、村井委員と阿部委員にお聞きしたいのですけれど、やはりこういう活動は授業の中でしかできないものなのか、野菜とか花の栽培は、授業ではなくて、他の学校生活の中でやっていくものではないかなと思ったときに、授業外でもこういった栽培のところに地域の人がかかわれるのかどうかというあたりを教えていただきたいと思うのですけど。村井さん、いかがですか。
村井委員	学校の先生の方に先に聞いたほうが。
事務局	阿部委員、どんなですか。やはり授業でないとこういうのは難しいものなのでしょうか。
阿部委員	授業でないと、というと、どういう活動を考えていますか。
事務局	例えば、普段の生活の中で栽培したりすることは、子どもたちはできるものなのかなと思って。地域の人が教えにきて、そういう時間を使えたりするのかどうかというあたりを教えてもらいたいのですけれども。授業でないとやはり難しいものなのでしょうか。
阿部委員	そうですね、授業とか、あるいは例えば委員会とかクラブとかという、やはり授業の枠組みの中で、学校が進めるとしたら取り組むということになるのではないかなと思いますけれども。例えば、授業ではないけどひまわりクラブ、学童保育が子どもたちと一緒に活動したいから、そこで学童保育のところの花を植えましょう、みたいな活動で花育マスターをお呼びするとか、栽培の方をお呼びするというのは、花育だとやっているという話はお聞きしました。
事務局	分かりました、ありがとうございます。
村井委員	多分、私も思うのですけれども、授業以外のところで、日常生活の中でボケを買いに行って植えるかといったら、多分どこのご家庭も残念ながらやらないのではないかなと思うし、ボケの生産者の孫とかだったら、周りに環境があるけれども、そうでないところで、いざボケの苗木を買ってきて、俺、育てるなんて子は、まずいないと思うので。これは正直なところ、学校の授業で取り組まざるをえないのかなと。ただ、それを教える意味の第一歩として、地域のことを理解してもらうというところでは、ボケの栽培は大事なことではないかなと思います。これをなくしてしまうと、さっきいったように、新潟市の魅力は何だ、といったときに、小須戸の魅力は何だといったときに、ボケという言葉

	が出なくなってしまうのではないかなと危惧されるところもあるので、やはりこれは継続してやっていったほうがいいのではないかなと、私は思っています。
事務局	ありがとうございます。
中野会長	他、いかがでしょうか。それでは、ないようでしたら、次に移りたいと思います。最後にその他ということなのですけれども、委員の皆さまから何か報告などありましたらお願いいたします。 特にないようでしたら、事務局にお返ししたいと思います。ありがとうございました。
事務局	ありがとうございました。中野会長、委員の皆さま、ありがとうございました。 次回の委員会は、令和４年度の７月、または８月を予定しております。事務局で第３次花育推進計画の骨子案を作成して委員の皆さまに見ていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。 では、最後に連絡です。今回の推進委員会の謝礼は、後日ご指定の口座に振り込ませていただきます。会場にお越しのお二人の委員については、駐車券、無料のサービス券と一緒に置いておりますので忘れずにお持ちください。 次回の推進委員会につきましては、日程など詳細が決まりましたらご案内を差し上げますのでよろしくお願いいたします。 以上を持ちまして、令和３年度花育推進委員会を終了いたします。お忙しいところ、長時間にわたりありがとうございました。オンラインでのご参加の委員は、退席ボタンを押してご退席ください。ありがとうございました。